## 「附中タイム」の取り組み

### 1．実践の概要

言語活動をより充実させるために、昨年度よりの取り組みとして週に１時間全教員により「附中タイム」を実施している。これは従来の教科の枠を外し、言語活動に特化した学習を行うものである。第１学年については言語活動の土台作りのため、従来の学級のままローテーション授業を通年で実施、第２～３学年についてはより言語活動を充実させるため、前期後期制で生徒の選択による少人数学級を再編成して実施する。

複雑な思考は言語がなければ不可能であるため、言語に関する能力を育成していくことで、より思考力・判断力・表現力が高まることが期待される。そのため各教科では教科特有の言語を用いてそれぞれの教科における思考力・判断力・表現力等の学力の向上をはかる。しかしその基礎となるべき言語に関する力そのものが、現状では十分に身に付いているとは言い難い。確固たる基礎を築いてこそ、それを土台として各教科における学力が有効に育成されるであろう。

具体的には文章作成の技術の向上、豊かな言語感覚やコミュニケーション力の育成等が土台として求められる。もちろんそれらは国語科においても取り組まれるが、「附中タイム」によりそれを補完し、また言語を通して自我の形成や感性・情緒の基盤づくりも目指す。

本年度の「附中タイム」各講座（前期）

| | 講座名 | 担当者 |
|---|---|---|
| 1 | デジタルデバイスのコミュニケーションツールとしての活用　（１年） | 藤井 |
| 2 | 谷川俊太郎にせまる　（１年） | 平山 |
| 3 | 動きを言葉で表現してみよう　（１年） | 小林 |
| 4 | 環境問題を考える　（１年） | 吉田 |
| 5 | 作家になる（ものがたりをつくろう） | 和田 |
| 6 | NIE 新聞社に意見を投稿しよう！ | 飯島 |
| 7 | バレーボールを創造しよう | 山戸・辻本 |
| 8 | 夢のスクラップブックを作ろう | 松井 |
| 9 | 奥深い さとう | 平田 |
| 10 | 合唱～さまざまな曲の良さを味わい表現しよう～ | 興梠 |
| 11 | ランゲージアート ２ | 中馬 |
| 12 | けやき坂ダッシュ～仲間とともに記録向上のための練習を考えよう～ | 田中 |
| 13 | みんなでものづくり～グループでベンチを作ろう～ | 高河原 |
| 14 | 手作りを楽しみ、エコライフを実践しよう | 宇都宮 |
| 15 | 世界でたったひとつの絵本をつくろう | 俵石 |
| 16 | 異文化コミュニケーション | 内田 |
| 17 | Peanuts で英語を学ぼう | 山形 |
| 18 | オーストラリア研修旅行に向けて | 板野 |
| 19 | いろいろな紹介文をつくろう | 陰山 |

本年度の「附中タイム」各講座（後期）

| 講座名 | 担当者 |
|---|---|
| 1　デジタルデバイスのコミュニケーションツールとしての活用　（1年） | 藤井 |
| 2　谷川俊太郎にせまる　（1年） | 平山 |
| 3　動きを言葉で表現してみよう　（1年） | 小林 |
| 4　環境問題を考える　（1年） | 吉田 |
| 5　作家になる | 和田 |
| 6　～ＮＩＥ～　新聞を読もう！ | 飯島 |
| 7　バレーボールを創造しよう | 山戸・辻本 |
| 8　夢のスクラップブックを作ろう | 松井 |
| 9　奥深いさとうⅡ | 平田 |
| 10　合唱～さまざまな曲の良さを味わい表現しよう～ | 興梠 |
| 11　コマ撮りおもしろ動画制作 | 中馬 |
| 12　けやき坂を走って体と心の調子を整えよう | 田中 |
| 13　みんなでものづくり～グループでベンチを作ろう～ | 高河原 |
| 14　手作りを楽しみエコライフを実践しよう | 宇都宮 |
| 15　ギターで伝える魂の歌声～弾き語り～ | 俵石 |
| 16　English　Lounge | 内田 |
| 17　Peanuts で英語を学ぼう | 山形 |
| 18　Movie in English | 板野 |
| 19　いろいろな紹介文をつくろう | 陰山 |

## 2．成果と課題

従来の教科の枠を外したことにより、それぞれの担当者が持ち味を活かして自由な言語活動の取り組みを行うことが可能となった。そうした取り組みにより、思考力・判断力・表現力の向上やコミュニケーション力の育成等に一定の成果があったと言える。

しかしながらより言語活動の充実を図るためには、

1．各講座内容の精選

2．ティームティーチングを含む指導の在り方の検討

3．評価規準の作成を含む評価の在り方

4．各教科・領域との積極的な連携

が求められる。

これらの研究を進めながら、次年度はより言語活動を充実させていきたい。

（前期・後期共　講座番号 14、15 の実践報告については都合により省略しています。）

## 附中タイム　デジタルデバイスのコミュニケーションツールとしての利用(藤井先生)

藤井　宏明

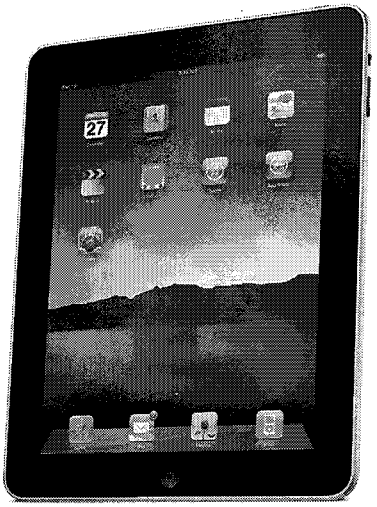
### 1．ねらいと内容

**ねらい**

自立し,共同する力をはぐくむ教育-コミュニケーション力を基盤として-という研究テーマのもとで，本講座では，コミュニケーション力の育成に主眼をおいて実践を行った。コミュニケーションの方法には様々な方法やカテゴリーがある。近年においてはパソコンが普及し，パワーポイントなどのプレゼンテーションツールも併せて広く普及してきた。プレゼンテーションソフトは研究内容や自分の意見をその思考過程も含めて表現するのに非常に便利なツールである。従来はプレゼンテーションソフトを利用するにはPC以外に利用するすべはなかったが,近年はスマートフォンやタブレット，iPodなどのミュージックプレーヤーが普及しプレゼンテーションソフトを利用するためのツールはPC以外の選択肢も登場するにいたった。そこで今回はPCよりも気軽に利用可能で，スマートフォン(iPhone)やiPodと共通のOSであるiOSを搭載したタブレットのiPadをプレゼンテーションツールとして用いて，プレゼンテーションツールをより身近に感じ，新しいプレゼンテーションスキルを身につけされる事によりコミュニケーション力の育成を試みた。

**iPadについて**

iPadではプレゼンテーションソフトとしてApple社のプレゼンテーションソフトであるKeynoteが利用可能である。KeynoteはMicrosoft社のプレゼンテーションソフトであるPowerPointと互換可能で,作成したプレゼンテーションファイルは書き出してPCでも利用可能であり，汎用性が担保されている。iPadはプロジェクター等外部出力装置を使ってPCライクな利用方法が可能である。一方で，PCと異なる点は大型のタッチパネル式液晶を持つためiPadの液晶画面を直接利用して数名の対象に容易にプレゼンテーションをすることが可能である。大きな会場でのプレゼンテーションは，発表者からの一方通行的なプレゼンテーションになりがちであるが，少人数に対するプレゼンテーションは相手と近い距離を保ちながら，その距離感の故に直接やりとりをしながらプレゼンテーションをしやすい。このため，iPadを用いたプレゼンテーションは，プレゼンテーションによるコミュニケーション力の育成とともに，プレゼンテーションを行いながら会話し，議論を行い，双方向的なコミュニケーション力の育成も可能であると考える。また，班でタブレットを囲んで議論しながらプレゼンテーションを作成していく過程でも,生徒間のコミュニケーションが行われ,コミュニケーション力を基盤とした,



**Apple iPad (MB292J/A)**

協働する力をはぐくむことが可能であると考え，授業実践を行った。

**内容**

今回ではこれらの狙いを念頭に，iPad とそのプレゼンテーションソフトである Keynote の基礎的な利用法の指導を行った。プレゼンテーションの題材としては附属中学校の紹介とした。iPad を 4 人班に 1 台用意し各 iPad の中には附属中学校の写真をあらかじめコピーしておいた。各班のプレゼンテーションの基本構成は総合学習習慣の基礎技能講座で考えていた下書きを利用させた。

第 1 次：iPad の基本的な操作法を学び，そのマニュアルを作る

第 2 次：Keynote の基本的な操作法を学び，そのマニュアルを作る

第 3 次：附中紹介を作成し，他の班にプレゼンテーションを行う

**グループでプレゼンテーションを作成する生徒**

## 2．成果と課題

今回の授業により，基礎的な iPad の利用法と，Keynote の利用法を指導することができ，多くの生徒が最低限 iPad を使用できるようになった。また，アンケートの結果，プレゼンテーションにより，話すよりも相手に効果的に伝えることができたり，発表の楽しさや班で協力してプレゼンテーションを作成する楽しさを実感できたという意見が得られた。また，この授業の後，一年生のボランティア体験学習では iPad を用いてプレゼンテーションを行うグループもあり，生徒の iPad を活用してコミュニケーションを行うための手助けができたのではないかと考える。しかし，今回は，基礎的なプレゼンテーションを行っただけなので，今後その活用を行いたい。

## 谷川俊太郎にせまる

平山ちさと

1．ねらいと内容

ねらい‥‥詩を読んだり学んだりすることは小学生の頃からしているが、いざ作るとなると、詩人としての才能が必要となってきそうで、中学生でなくとも敷居の高いものである。本講座では、ことばあそびを取り入れることで誰もが詩人になれることを体験し、さらにクラスメイトの詩に鑑賞文を書くことで、紙面を通しての対話を試みるものである。

内容‥‥①谷川俊太郎のことばあそびうたを分析し、韻を踏むことで生まれるリズムやユーモアを理解する。

②韻を踏む言葉を集め、それを構成し、ことばあそびの詩を作る。

③鑑賞文を読み、文の特徴や、話題提示の仕方を学ぶ。

④クラス内の誰かが作った詩（名前は伏せるかペンネームにしている）に鑑賞文を書く。

2．成果と課題

成果‥‥‥取り組み方を工夫することで、自分にも詩作ができるという体験ができたことは、今後の文章表現に取り組む上でも自信になると思われる。また、リズム感のある、人をひきつける言葉の組み合わせ方は、韻文だけでなく散文を書く際にも生きてくるはずである。また自作の詩を他者に鑑賞されるのはうれしいことで、次の創作意欲にもつながる活動となった。

課題‥‥‥鑑賞文を書く上で、ふさわしい語句の使い方や話題の取り上げ方について、個々に手を加えて指導するまでには至っていない。鑑賞文の質の面から言うと、まだ課題が残っていると言わざるを得ない。

# 動きを言葉で表現しよう

小林　佐知江

１、ねらいと内容

子ども達の日常にメールが浸透し、様々な内容がメールでやりとりされている。その中で、メールの誤った解釈によりトラブルが発生している。その「文字だけ」の世界で本当に自分の意図していることを発信できているのだろうか。そして反対に相手の意図していることを受け取っているのだろうか。また面と向かっての会話でも「自分は伝えたつもり」になっていても、相手に伝わっていないことが多々ある。これらのことについて生徒に気付いてもらいたく、発信方法として言語的な「書く」と、非言語の「動作」「表情」、受け取り側として「聞く」「見る」をコミュニケーションツールとして、授業を行った。

３時間の授業で、生徒自身にいろいろなことを感じ取ってもらおうと、特にこちらのねらいは説明せずに授業を行った。

1時間目：スポーツの動作（球技のパスの仕方、ラケット競技のストロークの仕方、泳ぎ方など）を１つ選び、その動作の説明書を作成する。

2時間目：班ごとで１人が１時間目に作成した説明書を読み、他の班員はその説明書通りに動く。作者が選んだ動作が、最終的にできているかどうか確認する。

3時間目：こちらが「喜怒哀楽」をもとにした題を出し、その感情を言葉を発することなく、動作と表情だけで表現する。

２、成果と課題

生徒の感想で「『ちょっと』や『たくさん』などの言葉は使いやすいやすいので使いすぎてしまうけど、聞く人によって度合いがかわってしまい誤解をまねいてしまう事もあるとわかった」「自分では分かっていても実は他人には通じていないことが多いということに驚きました」「言葉を聞いただけで、行動（動作）をするのは大変だったし難しかった」「動作だけや言葉だけではなかなか相手に伝わらず、両方あってこそ伝わるんだなあと思いました」など、こちらがねらいとしていることや、「表現力がついた」「語彙を増やそうと思う」など、こちらがねらいとしていなかったことも感じ取っていた生徒もいた。

課題としては、２時間目の実際に説明書を読み、聞いて、動いてみた授業で、最終的に班ごとに、一番わかりやすかった説明書とわかりにくかった説明書を１枚ずつ選び、教師がそれを読み、クラス全員おなじ動きをしてみる、ということを行った。時間がなくて、ただやってみただけになってしまったが、わかりやすいのとわかりにくいものとを分析し、どこがどう違うのか、どのような表現を用いているのか、などを知ったうえで、同じ動作をわかりやすく、もう１度書き直す、という振り返りの作業を行いたかった。

# 環境問題を考える

吉田　昂平

1．ねらいと内容

ねらい：日ごろの社会の授業において、生徒が自ら物事を考え、それを形として表すような機会を与えることは、授業時数の関係からも難しいと思われる。そこで本講座では、教師が題材を与えるのではなく、生徒が主体となって授業内容を一から創り上げ、その過程において、本校の研究主題でもある「自立し、共同する力」を育むことをねらいとした。

内容：①主題設定と役割分担（問題点・解決策・地図）、調べ作業

→環境問題という大きなテーマから生徒の自由な発想で班ごとに主題を設定する。

②調べ作業

→パソコンや本から情報を集約し、班内の各役割で絵一枚と発表用原稿を作成。

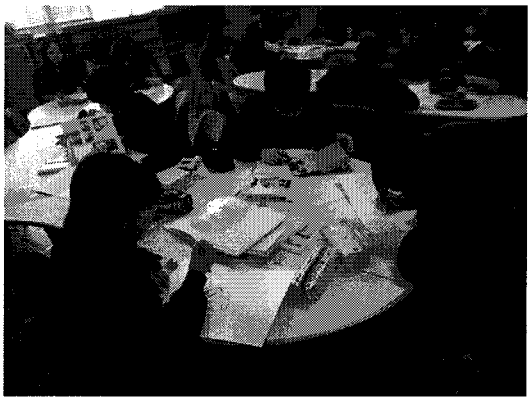
③発表、振り返り

→絵を効果的に用いて発表を行い、ワークシートで授業を振り返る。

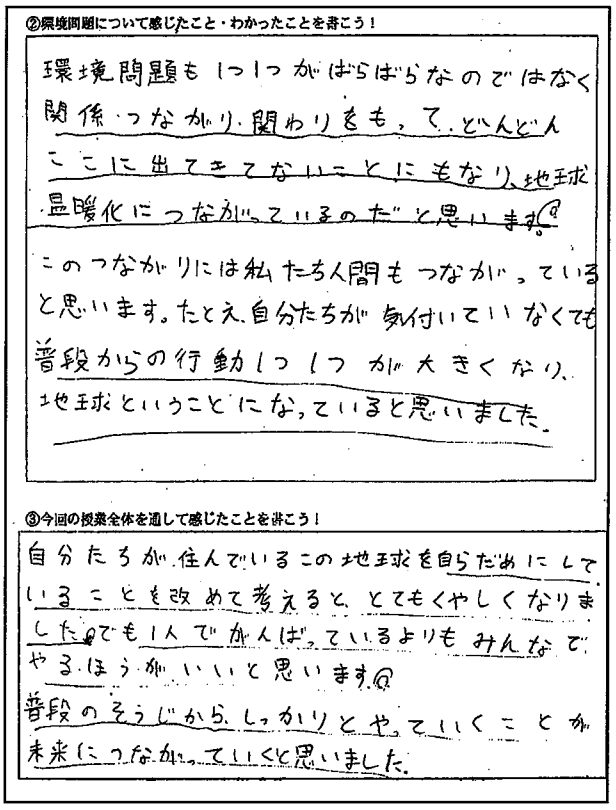
2．成果と課題

本講座では、環境保全に対する意識を深めることができたと同時に、様々な環境問題が関わり合っていることについても気付かせることができた。また、調べた内容を発表することによって、「伝える」ことの難しさを実感した生徒も何人かいたようである。

課題としては、主題設定の過程において、班で決めたテーマが絞られていたため、文献が少なかったということがある。そのため、生徒の持つ自由な発想を教師がある程度補助、誘導する必要を感じた。また、他にも、昼休みや放課後に作業をしている生徒の姿が何度か見受けられたことから、実際の作業時間や発表時間を充分に確保できなかったことが反省点となった。授業の開始から発表までの授業展開を改めて見直すことも大きな課題である。



「ワークシートの感想」



②環境問題について感じたこと・わかったことを書こう！

環境問題も1つ1つがばらばらなのではなく関係・つながり・関わりをもって、どんどんここに出てきてないことにもなり、地球温暖化につながっているのだと思います。

このつながりには私たち人間もつながっていると思います。たとえ自分たちが気付いていなくても普段からの行動1つ1つが大きくなり、地球ということになっていると思いました。

③今回の授業全体を通して感じたことを書こう！

自分たちが住んでいるこの地球を自らためにしていることを改めて考えると、とてもくやしくなりました。でも1人でがんばっているよりもみんなでやるほうがいいと思います。

普段のそうじからしっかりとやっていくことが未来につながっていくと思いました。

## 附中タイム　作家になろう

和田　雅博

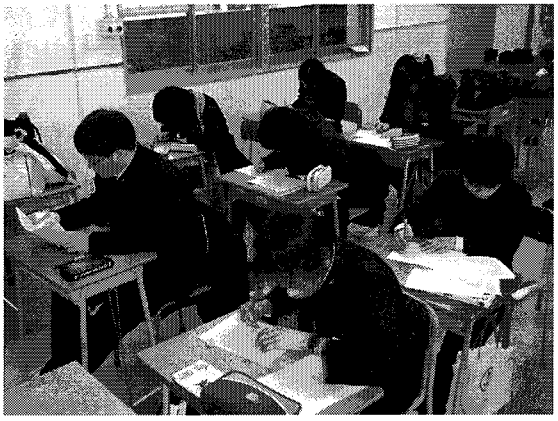
### 1、ねらいと内容

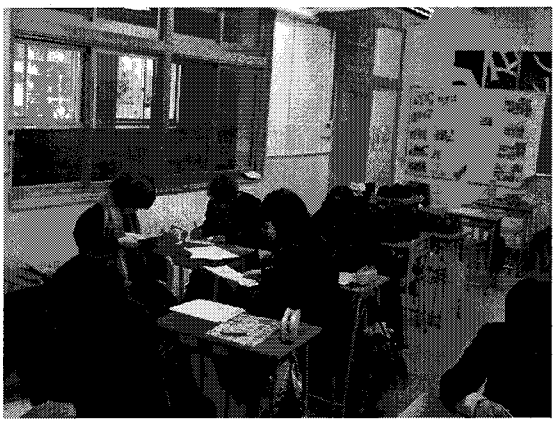
これまでの授業で学んできた「生活文」「意見文」「説明・報告・記録文」などを活かし、学習内容を「体験文」(1年生)、「レポート」(1年生)、「意見文」(2年生) を基盤として創作文を書いた。創作文を書くときは読み手にわかりやすく、内容が伝わるように書くことが必要である。活動中は読み手が常に目の前にいるのではないので、生徒は想定する必要がある。その想定した読み手に作品をわかってもらうためには、文章の内容・構成・表現を工夫する必要がある。創作の途中で生徒が作品を読み返すことはもちろんであるが、生徒同士で交換して読み合う際に交流し指摘し合うことを重視した。このような活動を繰り返し行い、書き手の認識が深まると考えた。

また、創作文を書くときは読み手の立場や意見、感情を想定しながら、自分の考えを表現していくことである。そこには、読み手にわかってもらおうとする書き手と、書き手をわかろうとする読み手との伝え合いの場が存在する。この活動で書き手・読み手が相互な視点から物事を認識し、自らの考えや思いを広く深くすることをねらいとした。

### 2、成果と課題

生徒は書いた文章を読み返し、文章を整えわかりやすいものにした。また、書いた文章を互いに読み合い，作品の展開の仕方について自分の表現に役立てることができた。活動中、生徒が夢中になって作品に取り組む姿がみられた。楽しく作品をとおして交流したり、意欲をもって作品の展開を想像するということにとどまらず、取り組みに没頭するといった課題に前向きな姿勢があった。





しかし、創作文を仕上げることは容易なことではない。また、内容・構成について「一人よがり」のものになり、読み手には内容が捉えにくいものになりがちな課題であった。

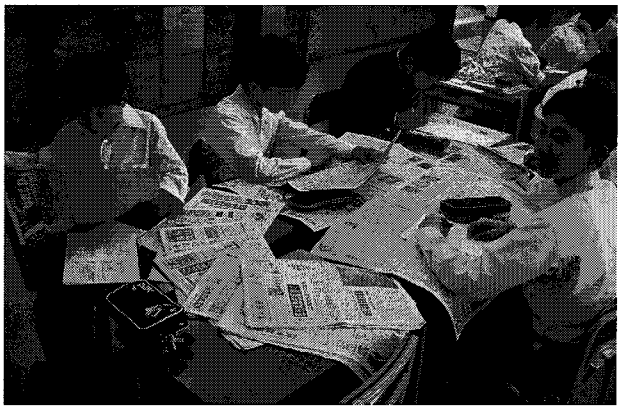
この難題を乗り越えるために、生徒同士での作品の「読み合い」は効果が大きかった。よりよいものに仕上げるためには，対話と試行錯誤が必要であり、自分の思いを熱心に語り、仲間の話にも真剣に耳を傾ける活動を設定した。さらに生徒はペアワークだけでなく、自発的に数多くの生徒に声を掛け交流する意欲も見えた。

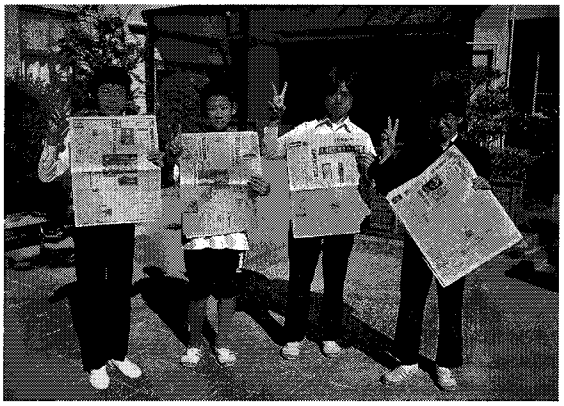
## 附中タイム　新聞を読もう！

飯島 知明

### １．ねらいと内容

平成 24 年度から全面実施される新中学校学習指導要領社会科の目標に、「 ～諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、～ 」とあり、その内容の取扱いについては、「 地図や年表を読みかつ作成すること、新聞、読み物、統計その他の資料に平素から親しみ活用すること 」とあることから、今後さらに飛躍的に発展することが予想される高度情報化社会に対応すべく、生徒自らが社会的事象を見い出し、諸資料（ここでは主に新聞）を適切に収集、選択、判断、処理、活用する力の向上を目指し、『 新聞を読もう！』を開講した。





### ２．成果と課題

何かと多忙な中学生が、この講座において新聞（毎日・朝日・産経・読売・日経・大阪日日・京都・神戸・英字など）を５０分かけて読み込んだり、仲間と社会的事象について議論したり、または複数紙を比較することは新鮮だったと同時に、社会に対する自らの考えや主張、反論、批判などを思考し、練り上げる場ともなったことはたいへん有意義であったように感じる。さらに、それらの活動を通して思考した自分の考えを文章化し、最終的には新聞社への投稿という形で表現することで、まさに社会科が目指す『 思考・判断・表現 』活動となった。なお、この取り組みでは９名の投稿が採用された。

新聞社に採用された投稿（日付は新聞掲載時）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 平成２３年１０月 | 読売新聞 | 「国会で真に国民が望む議論を」 | 中学三年生男子 |
| 平成２３年１０月 | 朝日新聞 | 「情報を読み解く力をつけたい」 | 中学二年生男子 |
| 平成２３年１０月 | 産経新聞 | 「新聞を読んで生活に変化が」 | 中学二年生男子 |
| 平成２３年１１月 | 読売新聞 | 「なんて中身のない『おばけ』論争だ」 | 中学三年生男子 |
| 平成２３年１２月 | 読売新聞 | 「自分の信念貫く警察官目指す」 | 中学三年生男子 |
| 平成２３年１２月 | 産経新聞 | 「日韓がパートナーとなる日を」 | 中学三年生男子 |
| 平成２４年２月 | 朝日新聞 | 「今こそリーダーシップを」 | 中学三年生男子 |
| 平成２４年２月 | 読売新聞 | 「まわりに流されない政治を」 | 中学三年生男子 |
| 平成２４年２月 | 読売新聞 | 「受験生のために対策を」 | 中学三年生男子 |

課題として、『 思考・判断・表現 』といった社会科の評価規準の判定基準を何を持って見取るのかは今後も検討が必要である。ただ前述の通り、新聞教材は『 思考・判断・表現 』を無理なく一連の流れで実践することが可能性な教材であると思われる。

# バレーボールを創造しよう

山戸正啓・辻本堅二

1．ねらいと内容

ねらい　①バレーボールの技術習得やニューバレーボールの実施に向けて意欲的に取り組む。

②課題の発掘および課題解決のために、パートナーまたはチームメイトと適切にコミュニケーションを図り、その方策を見いだす。

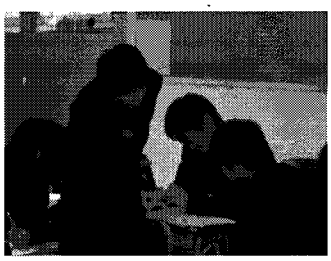
③ニューバレーボールの創造に向けて、様々な観点から考案することができる。

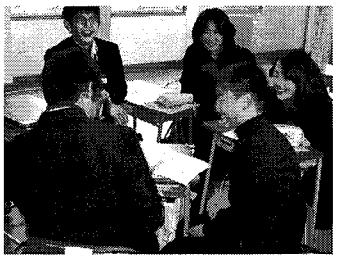
内　容　①続くラリーを考えよう

ボールに慣れ、ラリーを通してオーバーハンドやアンダーハンド等の基本技術を習得する。その中で、ラリーが続かない原因を模索し、従来のバレーボールのルールにはない特別ルール（キャッチ＆スロー、バウンドアンダー等）をとり入れながら、より長く続くラリーを追求する。

②ニューバレーボールの考案・試行

各グループ（チーム）で「めざすもの」（大切にしたい考え）、「問題点」（一般のバレーボール実施の際に考えられる問題）と「その解決策」を踏まえ、新しいバレーボールのスタイルを考える。その際、グループリーダー（キャプテン）が中心になり、グループ内でのコミュニケーションを図りながら、多様な視点をとり入れる。その後、考案したゲームスタイルで実際に競技する。





③ニューバレーボールの改良・発表

競技をしながら、課題を発掘・ルールの改良をくり返し行いながらグループが「めざす」ニューバレーボールを確立する。その後、各グループで考案、確立したニューバレーボールを全体で紹介する。

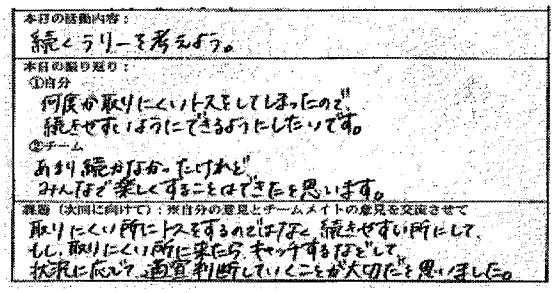
## 2．成果と課題

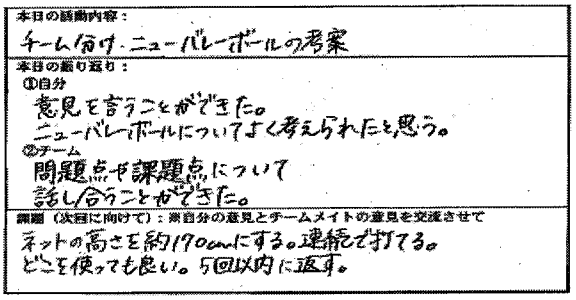
ニューバレーボール考案の際、どのグループも「誰もが楽しめる」バレーボールの創造を目標においた。しかし、既存のバレーボールのルールから完全に脱却することができなかった。そこで、バレーボールの楽しさについて着目させ、「ラリーが続く」ことに焦点化した。

その結果、今まで考えつかなかった特別ルールやプレーの工夫をとり入れ、同時にラリーが続く楽しさも実感できたようである。様々なプレーが含まれる競技において、プレーや場面を焦点化して考えることは、その競技の可能性を広げるために有効的であった。また、プレーを試行するたびにグループ内で課題発掘・解決に向けて常にコミュニケーションを図ることで、生徒たちの中で協同することの大切さや多様な視点の必要性を感じとれたようである。グループ内で共通の問題を解決するためには、見通しをもち道筋を立てながら話し合っていくことが重要であり、考案シートの活用は有意義であったと言える。

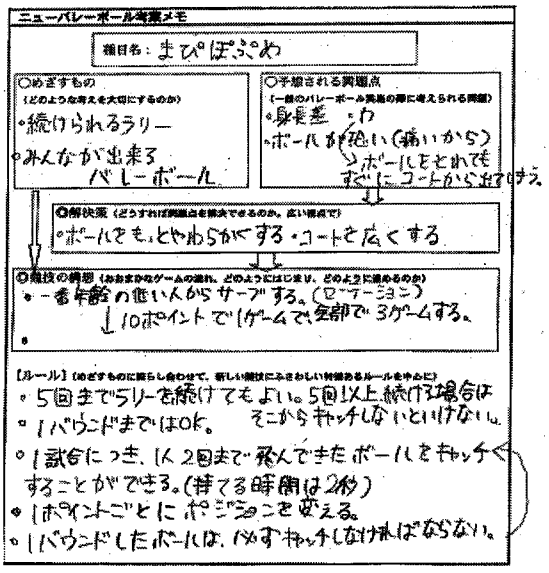
一方、プレー・競技と話し合い・ワークシートの記入のくり返しになる時間も多く、準備・片付けを含む 50 分の授業内では煩雑になることも多く、深まりが足りなかったことについては否めない。また、新しい競技の創造においては、「円滑な競技進行」の楽しさと「勝敗」に対する楽しさのバランスを考えることが不可欠である。そういった観点も考慮した取り組みを追求していくことが、よりコミュニケーション力や協同する力の育成につながると考えている。

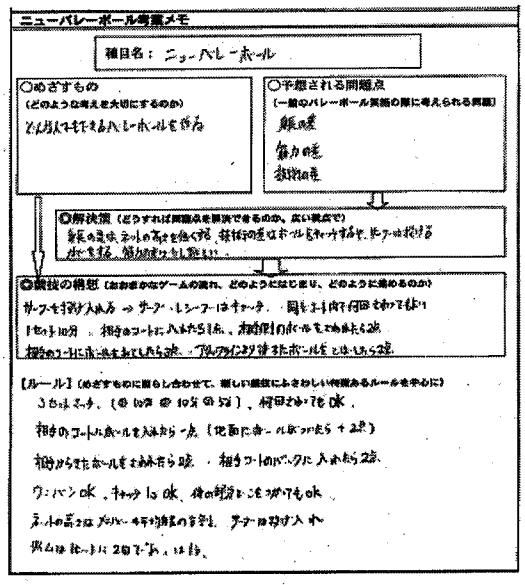
※生徒のワークシート例（一部抜粋）


本日の話動内容：
続くラリーを考えよう。
本日の振り返り：
①自分
何度か取りにくいトスをしてしまったので、
続きやすいようにできるようにしたいです。
②チーム
あまり続かなかったけれど、
みんなで楽しくすることはできたと思います。
課題（次回に向けて）：※自分の意見とチームメイトの意見を交流させて
取りにくい所にトスをするのではなく、続きやすい所にして、
もし、取りにくい所に来たら、キャッチするなどして、
状況に応じて、適宜判断していくことが大切だと思いました。


本日の話動内容：
チーム分け・ニューバレーボールの考案
本日の振り返り：
①自分
意見を言うことができた。
ニューバレーボールについてよく考えられたと思う。
②チーム
問題点や課題点について
話し合うことができた。
課題（次回に向けて）：※自分の意見とチームメイトの意見を交流させて
ネットの高さを約170cmにする。連続で打てる。
どこを使っても良い。5回以内に返す。

※ニューバレーボール考案メモ例


ニューバレーボール考案メモ
種目名：まぴぽぷぺ
○めざすもの
（どのような考えを大切にするのか）
・続けられるラリー
・みんなが出来る
バレーボール
○予想される問題点
（一般のバレーボール実施の際に考えられる問題）
・身長差　・力
・ボールが怖い（痛いから）
↘ボールをとれてもすぐにコートから出てしまう。
◎解決策（どうすれば問題点を解決できるのか。広い視点で）
・ボールをもっとやわらかくする・コートを広くする
◎競技の構想（おおまかなゲームの流れ、どのようにはじまり、どのように進めるのか）
・一番年齢の低い人からサーブする。（ローテーション）
↓10ポイントで1ゲームで、全部で3ゲームする。
【ルール】（めざすものに照らし合わせて、新しい競技にふさわしい特徴あるルールを中心に）
・5回までラリーを続けてもよい。5回以上続けた場合は
・1バウンドまではOK。　そこからキャッチしないといけない。
・1試合につき、1人2回まで飛んできたボールをキャッチすることができる。（持てる時間は2秒）
・1ポイントごとにポジションを変える。
・1バウンドしたボールは、必ずキャッチしなければならない。


ニューバレーボール考案メモ
種目名：ニューバレーボール
○めざすもの
（どのような考えを大切にするのか）
○予想される問題点
（一般のバレーボール実施の際に考えられる問題）
◎解決策（どうすれば問題点を解決できるのか。広い視点で）
◎競技の構想（おおまかなゲームの流れ、どのようにはじまり、どのように進めるのか）
【ルール】（めざすものに照らし合わせて、新しい競技にふさわしい特徴あるルールを中心に）

# 夢のスクラップブックを作ろう

松井　悠歌

## 1．ねらいと内容

ここでいう『夢』というのは将来なりたいものではなく、やりたいこと、今やってみたいこと、欲しいもの、こんなふうになりたいという憧れなど、これも夢？と思うようなちょっとしたことも全て『夢』として扱っている。

なんでも『夢』にしてしまうと、例えば、「〇〇が食べたい」というような今日にでも実現できるような小さなことから、「〇〇語が話せるようになりたい」というような努力の必要なことまで幅が広がる。特に、小さいことならすぐにでも実現できる。そのような当たり前に触れ、多く実感させることで、『夢』は実現できるもの、という意識に変えさせ、毎日をわくわくしたものにさせることがねらいである。また、自分の『夢』をスクラップにすることで、『夢』をより身近にさせることもねらいである。

授業の内容は、以下の流れで行なった。

①『夢』を 100 個見つける。

②①をカテゴリー別に分ける。

③②からスクラップしたいカテゴリーを選び、資料を集める。

④スクラップにしてまとめる。

## 2．成果と課題

最初に自分の『夢』を自由に 100 個あげさせることで、生徒たちがそれぞれやりたいことをたくさん持っていることを知り、また生徒自身もそこからどんどん自分自身でやりたいことなどを広げられた。その後、それをカテゴリー別に分けることで、それぞれ自分の好きな傾向を確認することができた。またそれをスクラップにすることで、生徒たちが今、本当に好きなこと、やりたいことなどを知ることができた。

この授業を通して、最終的に『夢』は１人では実現できるものではなく、そのための仲間が必要であることを伝えたかったのだが、そこまでには至らなかった。スクラップブック作りは、終わりのない資料集めである。それを授業内に完成させ、他の生徒たちに自分の『夢』をシェアすることで、他者との交流をさせ、仲間作りのきっかけとしたかったのだが、前期・後期ともそれは達成できなかった。

今回は、スクラップ作りをすることに重点が置かれてしまったので、授業の構成を改め、最終的に伝えたいことをもっと明確にして取り組むことを今後の課題とする。

# 附中タイム　奥深いさとう

平田　豊誠

## 1．ねらいと内容

本講座のねらいは，以下の3点とした。

A)　実験の基礎的・基本的な技能を習得し，安全に実験を行うことができる。

B)　さとうの温度による性質の変化に気づき，日常的に接している「さとう」を科学的な視点から見ることができるということに気づく。

C)　さとうの温度特性に興味を持ち、さまざまな温度に応じた砂糖のふるまいを実験を通して知り，さとうの奥深さにふれようとする。

なお，本校の設定する附中タイムの趣旨に沿い，以下のようなねらいもあわせて設定した。

ア）グループ単位で実験を行い，毎回，話し合い活動を取り入れる。

イ）実験を行うだけでなく，実験した結果や反省を表現する活動を取り入れる。

ウ）表現活動の一つとして，本講座内容を本校文化祭において，一般参会者に向けて，さとう菓子つくりの実演を行う。

本講座は，全7回の講座であり，右図1のような指導計画に基づいて実施した。

| 内　容 |
|---|
| オリエンテーション |
| 附中タイム①<br>まずはべっこうアメ作り |
| 附中タイム②<br>懐かしカルメ焼き |
| 附中タイム③<br>次はカラメルソース作り&ついでに出来るか手作りコーラ |
| 附中タイム④<br>○○に挑戦！夏休みの課題，ドロップはできるか |
| 附中タイム⑤<br>挑戦課題発表&甘味料比べ，キャラメルにしてみよう |
| 附中タイム⑥<br>課題に挑戦しましょう&フォンダンは難しい！？ |
| 附中タイム⑦（最終）<br>あぁ最終回 |

**図1　奥深いさとうの指導計画**

①べっこうアメ（165℃付近）つくりで，温度によって砂糖の変化（色や泡の出方等）に注目させた。また，火の取り扱いなどの基礎的・基本的な技能の定着・確認を行った。②カルメ焼き（125℃付近）では，化学変化と原子・分子の単元と連動した内容とした。③カラメルソース（165～180℃）を作成することで，高温までの砂糖の温度による変化にしっかりと注目させた。④ドロップ（145℃付近）で，砂糖以外に，水あめを入れるという，他の物を加えた実験とし，砂糖のみの時とのふるまいの違いを確認した（図2）。⑤キャラメル（115℃付近）では，バターとホイップを入れ，油脂分によるふるまいの違い，味の違いを実感した。⑥フォンダン（110℃付近）は，砂糖が菓子のメインではなく，他の菓子の補助として工夫されて用いられていることを学んだ。⑦最後の時間は，①～⑥までの実験で，グループごとに再度チャレンジを希望したさとう菓子を作成するようにした。再チャレンジに際しても，しっかりと話し合い活動を行い，再チャレンジしたい理由を述べることとした。

**図2　ドロップにするために高温のさとうをこねている様子**

## 2．成果と課題

各授業ワークシートには図3や図4のように，「話し合った点，協力し合った点」を書くようにした。その結果，実際に話し合った内容などが端的に記載され，実際の活動を書き言葉で表現し，記述として残すことにつながった。

最後の授業における，再チャレンジの動機と決意を語ったものが図5である。図5の生徒のグループは，しっかりと調べて最後の授業に臨み，自分たちが納得できるキャラメルが出来るように準備して来ていた。自分たちが調べ，実施した結果として，キャラメルという作品で表現することにつながった。

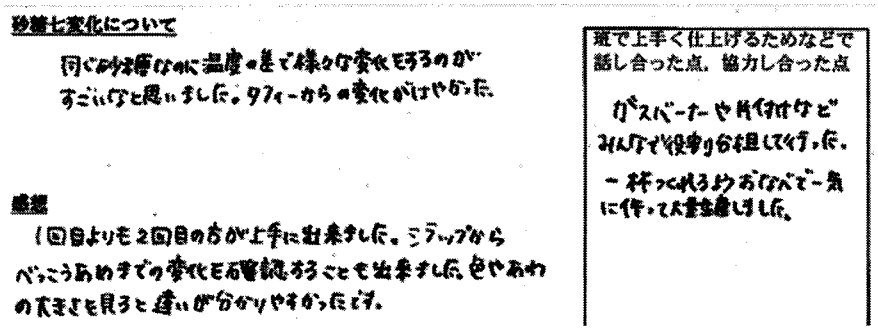



図3　べっこうアメの時の生徒プリント記載の例

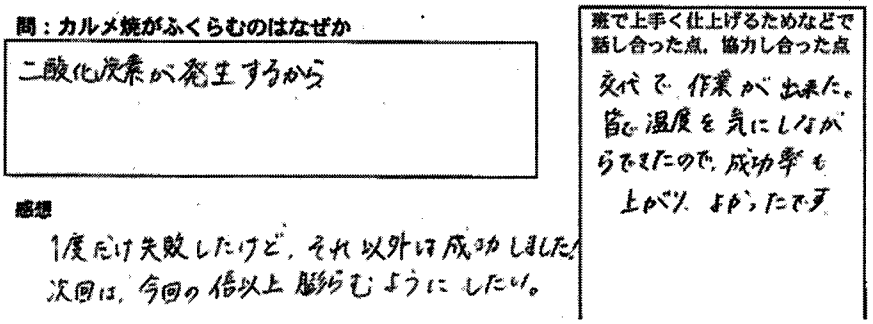



図4　カルメ焼の時の生徒プリント記載の例

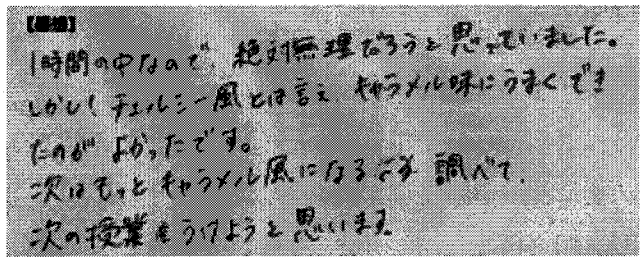



図5　最終回の授業を前にグループで話し合い，次につなげようとしている表現

図6，図7は文化祭での発表の様子である。生徒たちは自ら学習したことを，今度は教える側，伝える側として，話し合いを進めながら工夫行った。その結果，実演会場のレイアウト，配置から会場の飾り付け，注意書きまでを行った。特に図6の注意書きは，アレルギーへの配慮も書かれていた。これにより，生徒の授業の理解度と，説明の必要性の取捨選択能力が高いことをうかがい知ることが出来る。

今後の課題として，言語活動の場面だけを重視するのではなく，1つの授業に，何らかの表現活動を取り入れていくことが可能かどうかを試行していくことも必要であろうと考えられる。すなわち，話し合い活動→集団思考→思考の表現，という本校の研究の礎となる授業となっていくと考えられる。

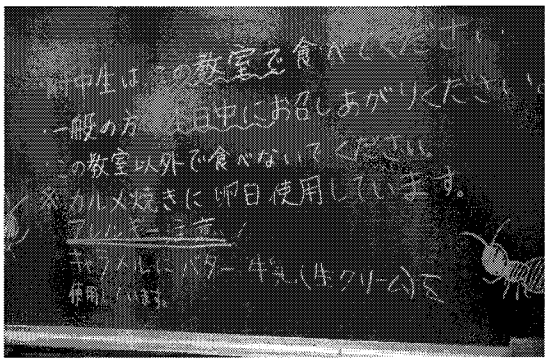



図6　文化祭準備において生徒が記載した一般者向けへの注意書き

図7　文化祭でキャラメルを実演している本講座選択者

## 合唱～いろいろな曲を味わい表現しよう～

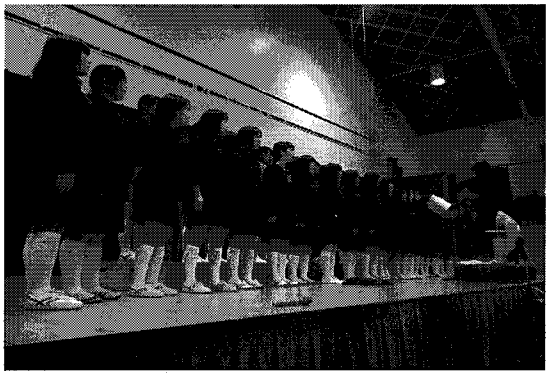
興梠　徹

### 1．ねらいと内容

今年度の附中タイムでは、合唱という音楽表現のスタイルを通して他者とイメージを共有しあったりする中で、言葉を用いて自分がイメージしたことを説明したり、合唱表現を通して音で伝えあって他者とイメージを共有するという活動から「言語活動の充実」を図るというねらいをもって取り組んだ。今年度は通年で行なってきたが、多種多様な曲を歌う事ができた。まず前期では、文化祭での発表に向けて、ゴスペル曲の「Hail Holy Queen」、映画音楽の「A Whole New World」、そして生徒自作曲の「未来の君へ」の3曲を中心に行なった。「A Whole New World」は英語の歌詞に挑戦し、「未来の君へ」は生徒が文化祭発表に向けて合唱曲を作り、別の生徒がそれに歌詞をつけて合唱した。そして後期では、3月に「ランチタイムコンサート」を生徒が企画し、それに向けて第78回NHK全国学校音楽コンクール課題曲の「証」と「ハナミズキ」の2曲を中心に行なった。また今回は人数の関係から、前期は3部合唱、後期は2部合唱の形式をとった。

### 2．成果と課題

まず前期では、文化祭にむけての発表を目標にしたことで、「Hail Holy Queen」、「A Whole New World」、「未来の君へ」のそれぞれの曲想を生かし表現するためにはどのような歌い方をすればよいかを、生徒同士が話し合い考えるような活動を重視した。授業では指揮者、パートリーダー、伴奏者が中心となって、何回も音源を聴き合いながらイメージを統一するため話し合ったり、練習の場では生徒自らが課題を見つけ出し、積極的に練習で克服する姿がうかがえた。また文化祭当日では、自主的な練習の成果もあり見事な発表を行なって見せた。中でも「Hail Holy Queen」では、美しい3部でのハーモニーや、その中で3年生の一人がソロパートを歌う場面で、会場全体がその雰囲気と歌声に惹きこまれた。そして後期では、残念ながら受講した人数が少なく、生徒一人ひとりの負担が増えて大変だった部分もあったが、「ランチタイムコンサート」に向けて、生徒自ら企画し積極的に励む姿勢が見られた。少ない人数ながらも、どのように合唱表現をしたら聴き手に思いが伝わるかを考えながら取り組み、主たる合唱表現の中にも時折ハンドベルやフルートを取り入れたりと様々な工夫も見られた。以上から、「言語活動の充実」というテーマを受けて、合唱という音楽表現を通して生徒同士のコミュニケーションや、音や音楽を介した質の共有の部分から、充分に言語活動の活性化が図れたのではないかと考える。



# ランゲージアート2/おもしろコマ撮り動画制作

中馬　真里亜

## 1．ねらいと内容

今年度も、前期附中タイムは「ランゲージアート」を継続して実践した。制作方法は昨年度と基本的には同じだが、文字を表記する素材を紙に限定せず、制作者の選択制を取り入れた。結果、廃材を利用して、数枚の板にスプレーで表す作品や、ファイルなどの文房具にスプレーする形態が登場した。

また、新たな素材を活用せず、紙を利用することを選んだ生徒の中にも、表現したことばに対応して、紙を加工する様子も見られた。バリエーションがどこまで有効か、制作時間との調整など、今年度は実験的な側面があった。

後期の「おもしろコマ撮り動画制作」は、デジタルカメラを使った表現の発展として、取り組んだ。デジタルカメラで撮影した静止画をつなげることによって、人間が空中を浮遊したり、動かないはずのものを生きているかのように動かすことができるなど、不思議な動画が作成できる。

それらの原理を理解した上で、生徒達がチームで、撮影内容を決定していった。

集団思考の作品化と、学校という空間を使いながら、身体を動かし、多角的に作品を見渡す力の育成につなげることをねらいとした。

## 2．成果と課題

「ランゲージアート２」では、素材を扱うことが初めての生徒にとって、発展的な導入になってしまったことが今後の検討課題である。文字（ことば）の選択意図に、さらに素材の選択意図が加わることで、やや表現が複雑なものになり、本来の文字（ことば）に着目する部分が薄まっている状況が見られた。ただし、生徒の発想が作品に反映される形は重視すべきことなので、制作時間と生徒の実態に最適な授業展開を行っていきたい。

「おもしろコマ撮り動画制作」では、被写体をどのように動かせば、自分のイメージにぴったり合うのかを各々に考えながら、言語を介して活発に話し合う様子が見られた。

構図を集団でイメージしながら、それぞれが何をすべきか確認しながら、それらを言葉に変換していくことに苦戦し、工夫した結果が、反省に見られたと同時に、作品という形で残されることとなった。

附中タイム前期

## けやき坂ダッシュ
## ～仲間とともに記録向上のための練習を考えよう

教員名　田中　哲也

### 1．ねらいと内容

附属池田地区の名所と言われる「けやき坂」を活動の場として健康の保持増進と体力の向上、コミュニュケーション活動をねらいとした内容である。

体を動かすことの楽しさや充実感を味わうこと、仲間とともに目標設定から考える練習メニューの計画や練習、練習実践や記録確認活動などを通して協同で活動する楽しさや効果、目標の達成感などを体験してもらいたいと考えた。

| 練習メニュー | 記録向上メモ |
|---|---|
| アップ500<br>2000(5分/km)<br>70mインターバル×4本<br>ダウン500m | 持久力を中心にした<br>メニューだった。<br>インターバルのきりかえ<br>をもっとできるようになりたい。<br>速度が高~~かった~~ので、<br>水分補給に気をつけたい。 |

### 2．成果と課題

生徒は記録を向上させようと各グループで思考錯誤しながら練習メニューを計画、変更したり最短距離のルートを考えたり活動全般前向きに取り組めていたように思える。週１回の活動なので継続した練習はできなかったが。記録向上した生徒が大半いた。

**けやき坂ダッシュを終えての振り返り**

考えて工夫することで、タイムがちぢんだりのびたりするのがたのしかった。
また、部活の練習と違って、みんなでメニューを考えたり、
楽しく走れたりできたのがよかった。

附中タイム後期

## けやき坂を走って心と体の調子を整えよう

### 1．ねらいと内容

前期と同様「けやき坂」を学習活動の場の中心として行った。体を動かすことによって、心と体の調子を整える活動にした。運動の実践と仲間との活動による心と体のリフレッシュがねらいの中心である。

| 今朝起きた時の心と体の調子は？ | 活動後の心と体の調子は？ |
|---|---|
| ・だるい<br>・少しだるい<br>・すっきり | ・まだだるい<br>・走り過ぎて疲れた<br>・疲れたが心はリフレッシュ<br>・少し調子を取り戻した<br>・心と体もすっきりした |
| 活動前の心と体の調子は？<br>・だるい<br>・少しだるい<br>・すっきり | 一言<br>体を動かすと何もかも忘れて楽しい!!リフレッシュできた!! |

### 2．成果と課題

活動前に心と体の調子をチェックすることによって、自分の心と体と向き合い調子を確認することができた。運動が苦手な生徒も自分のペースで活動できるということで積極的に活動できた。自ら心や体の調子を上手くコントロールし調子を整える活動になったのでは中と感じている。

長距離は高まり得意じゃないので不安でしたが、
友達がいたので頑張れました。走った後はしんどいけど爽快感があったです。

## 附中タイム　みんなでものづくり～グループでベンチを作ろう～

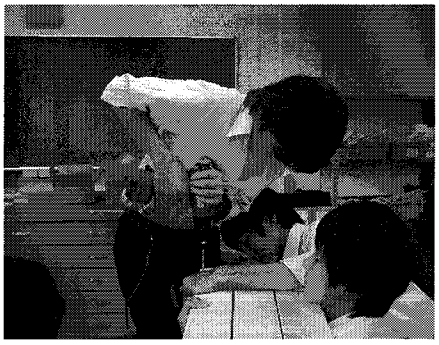
技術科教諭　高河原　健

### 1，ねらいと内容

2，3年生については，1年時に自ら作品を設計し，木工製品を製作するという活動を行ってきた。これは，あくまでも個人レベルでの生活に必要なものを見つけ出し，大きさの決められた一枚の板材から作品を製作することであった。そこで，これらの学習活動を体験した生徒にグループでひとつの大きな木工作品を製作させる。生徒たちには，現在ある中庭のベンチを参考に実測させ，自分達のベンチを設計させる。使用したのは，２×４材であり，これは，比較的安価で加工がしやすいという利点がある。生徒たちが，製作の過程で毎時間，お互いに意見を出し合い，また，協力し作業することを通して，一つのものを作り上げるという活動を体験させたい。その中から，ものづくりを通じて工夫し創造するという技術・家庭科で育みたい力に，さらに協同する態度といったものをねらいとして考えた。

・ベンチを実際に眺めメジャーで実測しながら設計していく

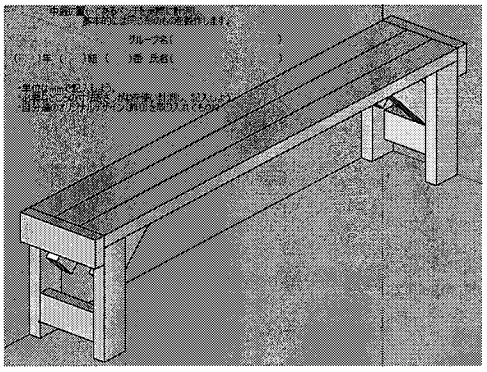
・材料にけがきを行う

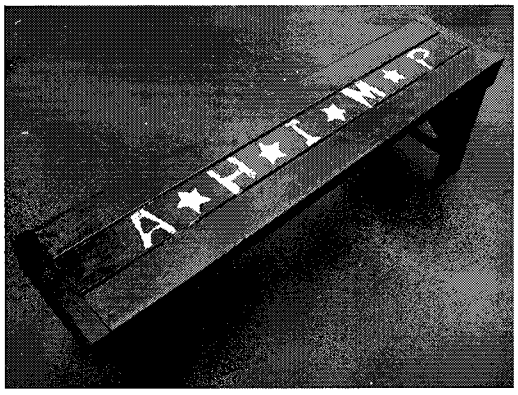


・組立ての様子

### 2，成果と課題

今回の講座を開催し，成果としてあげられることは，ねらいであったグループ全員が協力するという姿勢が，ものづくりを通じて得られたことである。右の図は，中庭にあるベンチを参考にして描いた図であるが，生徒たちはこれを元にオリジナル化を行った。一つの目的（ベンチを完成させる）があり，それに向かい，一人一人が自分のできることを進んで見つけ行えていた。みんなが毎時間，相談しながら積極的に作業する様子は，こちらが見ていても安心感があり，ものを作り上げる喜びを感じているように見えた。また，出来上がったベンチにみんなで座り大変満足そうな表情を浮かべていたのも印象的であった。






設計図は，それを通じてみんながコミュニケーションを行える一つの言語であると今回の活動を通して実感した。これは，日本語でもない英語でもない世界共通の言語であるように思う。今後も，このようなものづくりを通して生徒たちに言語活動の充実を図っていきたい。

# English Lounge

内田　航介

## 1．ねらいと内容

本校英語科では、普段の授業の中で、生徒同士で会話をする機会を設けている。英語で会話をするには、話す英語の正確さと流暢さが両方大切である。また、母語ではない英語で話すことは、言い間違えたり、伝わらなかったりする不安を伴い、多くの学習者が消極的になりがちである。つまり、生徒が英語で会話をできるようにするには、英語の正確さ・流暢さの両方の点でバランス良く力をつけ、英語で意思疎通ができるという自信をつける指導をすることが必要である。残念ながら、普段の英語の授業の会話練習の時間だけでは、流暢に英語を使うことも、自信をつけることも十分には指導できていない。そこで、この講座では、1 時間英語のみの会話をする授業を通して、英語で話す流暢性・自信をつけるとこをねらいとした。

具体的な取り組みとしては、以下の通りである。

①毎回の授業で、1 分間のモノローグで話せる語数をペアでカウントし合う。

②グループ（4 人～15 人）で、与えられたトピックについて会話をする。

①では、英語の流暢性を、1 分間に話せる語数（Words Per Minute: WPM）という分かりやすい指標をつけて、毎回計測した。②でも、積極的に会話に参加したことの指標として、発言した回数をカウントさせた。英語の流暢性や会話における積極性は、その能力を測定する指標があまり知られていない。よって、学習者は目標を見つけづらく、また、学習の成果も実感しづらい分野である。そこで、上述のように、分かりやすい指標をつけることで、学習意欲の向上を目指した。

また、会話をするグループの人数を、4 人程度の小規模のグループで始め、英語を話すことに不安を感じている生徒が話しやすい環境を作ることを心掛けた。

## 2．成果と課題

取り組み①においては、回数を重ねる毎に WPM が増えた生徒は少なかった。原因として考えられるのは、練習の頻度とトピックの難易度である。この講座の開講頻度（週 1 回）では、効果的に流暢性を伸ばすには十分ではなかったことが考えられる。これに対しては、受講期間中、各自で WPM を測定する宿題を課すことで改善できるであろう。また、トピックの難易度により、WPM は増減することが考えられるため、トピックの難易度調節が課題である。

取り組み②においては、附中タイムの性質上、2 学年にわたって面識の無いもの同士が受講するので、お互いが会話をする程に打ち解けるまでに時間がかかった。この点も、改善すべき大きな課題である。

# *Peanuts* で英語を学ぼう

山形　傑

## 1. ねらいと内容

①原作を読み、状況に応じた和訳・英訳活動に工夫して取り組む。

辞書にあるままを和訳・英訳するのではなく、場面や設定に応じて適切な英語、日本語で表現する。２，３年生と学年をまたいでいることや、また英語の得意・不得意がある中で、同じ作品を読んだとしても個人によって様々な表現の差が表れた。本講座で意識した辞書だけに頼らない活動を取り入れる上では個人思考から集団思考へとステップを取り入れることで、より積極的な意見の交流などが見られた。

②原作から異国の文化や社会背景などに興味を持ち、自分の考えを深める。

和訳・英訳活動に終始するのではなく、*Peanuts* の世界から外国の社会や文化を読み取り、個人で熟考する、あるいは集団で話し合い考えを深め合う。

③オリジナルの作品を作ることができる。

本講座の最終段階として①②を踏まえてオリジナルの作品を作成した。そのためのステップとして、まずはPeanutsのような４コマ漫画に見られる起承転結を意識づけるような活動をした。個人とグループでアイディアを練る時間を設定し、他人の様々な意見を取り入れる機会を設けた。

## 2. 成果と課題

本講座を通して生徒たちは英語の文面だけでなく、その背景にある文化や社会にも興味を示した。他にも、状況や発言の意図など目に見える以外のものを理解しようとしていた。また、４コマ漫画が起承転結を基にした一連のストーリーとしてとらえる過程で個人だけでなく集団での活動を取り入れたことで、幅広い視野とより多くの知識を基に議論が行われていた。

言語レベルでみると、当初は辞書に載っている日本語や英語にとらわれている様子が多く見受けられた。それは日頃の授業でもしばしば見られる光景ではあったが、生徒にとって馴染みのない *Peanuts* を読むうえでさらに顕著に表れていた。しかし、個人で考えた後にグループでの意見交換、さらには他学年の生徒と教え合う機会を設けることが効果的だったようで、既習事項を最大限に活用して積極的に意見が飛び交うようになった。

一方で、集団思考を行うことでまわりに頼りすぎる一面が多かったことも否めない。集団思考の後、さらに個人で考えを深める時間をもっと設けることで、個人での学習の向上につながったのではないかと考える。個人での考えが深まった上でグループ活動をすることで、さらに充実した協同になると考えている。

図１　生徒の作品

図２　生徒の感想

作品を制作しての感想を書いてください。

社会風刺というと難しそうなイメージがしたけどやってみるととても楽しいんです。でも絵を描くのが大変でした…教科書を読むよりもずっと楽しく英語を勉強できました。

マンガとはただ読んで楽しむだけのものだったけれど、自分でつくってみても面白かったです。スヌーピーは好きだったし、スヌーピーのマンガをかけてよかったです。Peanutsのキャラクターはスヌーピーくらいしかちゃんと知らなかったけれどチャーリーやルーシーなどの魅力的な人物を知れて勉強になりました。

## 附中タイム Movie in English

板野　麻由美

### 1．ねらいと内容

英語を使ってグループでCMや映画を作成する授業である。英語という言語の技能だけではなく、自分が伝えたいことを正確に相手に伝えるためのふさわしい構成、効果的なBGM、その他さまざまな効果を考え付け加えることで、コミュニケーション力や創造力を高めることをねらいとしている。さらに、グループで一つのものを作り上げていく活動の中で、意見を交流する場面が多々あり、自立し協同する教育につながると考えている。

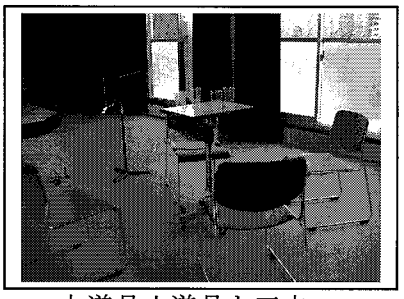
### 2．成果と課題

前半の数回の授業はCM作りで練習した。実際に放送されているCMにおける購買意欲を高めさせるような工夫に改めて気づき、同時にむずかしさも実感したようだが、各グループで架空の商品を作り、いろいろなアイデアを出し合っていた。その中で、ただ言いたいことを英語で長々と話すのではなく、簡潔でわかりやすい表現を選ぶ工夫も見られた。

映画作成では、英語の台本作りや配役、カメラワークも工夫するなど、より高度な活動となった。CM のように短く端的な台詞ではなく、長い台詞をジェスチャーなどを含めて言うことで、ただ知っている英語表現を棒読みするのではなく自然に話す練習にもなった。

グループで相談しながら撮影

動きが大きな演技


大道具小道具も工夫

課題は２点ある。①全７回の授業でCM作りと映画作成の２つの活動を入れたことに無理があったこと、②編集のためのPCソフトの使い方を３年生は知っていたが２年生はほとんど知らなかったことで、作品の完成度に差が出てしまったことである。

この２つの課題の改善方法について、活動内容をCM作りはなしにして映画作りだけにし、機材やPCソフトの使い方を基礎から指導する授業を入れることが考えられる。それによって、生徒たちがもつ創造力をより豊かな形で表現することを促せると考えている。生徒からより良い表現を引き出すために、指導者としてその素材（英語指導）や方法（映像化するための編集方法の指導）を提供することの大切さを実感した。

# いろいろな紹介文をつくろう

陰山　健

## 1．ねらいと内容

フィクション、ノンフィクションを問わず、様々な書籍の紹介文はその内容を端的に伝えることをねらいとして書かれている。その書籍を手に取ってもらうことを目的としているため、その文には読み手を惹きつける要素が含まれていることが多い。そうした紹介文を作る作業を通して、効果的に他者に伝えるための文章作成能力の向上を図る。

具体的な取り組みとしては、

① 複数の既製の紹介文を読み、自分が良いと思ったものから順位づけを行い、その理由も書く。

② 実際に文章で書かれた作品を読み、それをもとに紹介文を作成する。

③ できあがった紹介文を交換し、他者からの批評を受ける。

取り組み①においては順位づけの理由を言語化することで、効果的な紹介文のあり方に対する認識が深まることを目指す。そして取り組み②～③においては、他者の意見や感想を聞くことによって、自らの文章を練り直すことに重点を置く。そうした作業によって自らの表現を深めることを目指す。

後期には書籍だけではなく、短い映像作品を見てその紹介文をつくる作業にも取り組んだ。非言語的なものを言語化する作業を通じて、豊かな表現力の育成を図った。

## 2．成果と課題

取り組み①において、当初は生徒が良いと思った紹介文の特徴として、符号の使用、レイアウト等表面的な部分や、倒置法、省略法、一人称の文体等文法的な部分に比重を置いたものが多く見られた。しかし回を経ると、内容の具体性や抽象性等、内容的な部分に比重を置いたものも挙げるようになった。紹介文を様々な側面から読み取り、そのあり方に対する認識を深めることに成果があったと思われる。

取り組み②～③においては、自らが作成した文章が必ずしも意図した通りに相手に伝わっていないことを知ることは、効果的な文章を作成していく上では一定の効果があった。その上で自分の文章を、他者の意見を取り入れて振り返る再言語化により、自らの表現を深めることができたと思われる。

一方、文章を作成するというのが柱であったが、その際内容ではなく興味・関心を惹かれるような単語に頼る傾向が少なからず見られた。そこには常日頃のメディアの影響力の大きさが感じられた。内容の要約ではなく、他者に伝えその関心を惹くことを目的とした紹介文である以上、そうした特定の単語や表面的な工夫も有効な手法である。しかしそこからオリジナリティを出していくことは難しく、今後の課題である。

また後期に取り入れた映像作品の紹介文を作る作業では、非言語的なものを言語化することをねらいとしていたが、ストーリー性を追うことにのみ関心が向きがちであった。そのため表現を深めていくためには、鑑賞する力の育成、表現教科との連携も必要だと感じられた。